

12/06/11 08:01

Po001 時事通信

【オピニオン】★市長からの提言＝民意と役所の論理の橋渡し役として 津市長・前葉泰幸

◇役所にとっての抵抗勢力？

「政治家対公務員」という構図のもと、政治家は、「役所の抵抗に遭って実現できない」と語ることがある。施策事業の実現の前に立ちはだかる存在を抵抗勢力と位置づけ、有権者に自らの立場への理解を求めているのであろう。

しかしながら、役所には役所の流儀があり、職員がその流儀を守ることには理由がある。私は20年半、国と地方自治体で働いた経験からこうした「役所文化」に通じている。自分自身もそうであったが故に、職員の思考プロセスから行動様式に至るまで隅々まで理解しているつもりである。とはいえ、とても納得できない時は受け流さずにとことん職員と議論する。

津市職員は、合併前の10の市町村に採用されそのまま勤めている者が圧倒的多数である。



一方、私は、津市以外の地方自治体に12年、旧自治省など国の役所に8年半、さらに、外資系金融機関など民間企業に5年余勤務した経験を有する。国の視点、地方自治体の視点、民間の視点で物事を捉えることが可能になり、津市役所の流儀で物事が進んでいるのを見て、

- ・他の自治体ではもっといいやり方をしている
- ・国から見ると別の受け止め方をされてしまう
- ・民間では通用しない

といったことに気がつくことがある。この気づきは、私の過去の経験から得られる付加価値であり、津市役所という組織がこれを生かさないと手はないであろう。

市長は、市という組織の中で唯一の選挙で選ばれる政治家である。市議会と共に、有権者が求め期待する施策事業の実現を図るよう努める立場にある。

よって、私は、市民の思いを形にしようとする政治家としての立場から、役所側の施策事業が受け入れられない時には、たとえ職員がいかに大変な苦労を重ねて市長査定まで持ち込んできた案件であっても、それにストップをかけたり、変更を求めたりすることをためらわない。そのとき職員は市長が役所に対して抵抗勢力になったと感じるであろうか？

◇組織のトップとして高みを目指す

組織は飽くなき挑戦や改革をしなければ成長を止めてしまう。民のトップは常にこのことを意識して行動を起こしている。

民の表現を借りれば、首長も、組織のトップとして、経営資源である職員を効率的、効果的に活用し、その力を最大限に発揮させることによって、より高みを目指すべきである。その結果はいかに納税に見合った、あるいは、それ以上の恩恵を、市政への満足という形で市民が感じることができるかどうかということに表れてくる。

124年前、日本で最初に市制を施行した31市の一つである津の市民はその都市としての歴史に誇りを持ち、高い自治意識を育んできた。市民の望む「風格ある県都・津市」を展開して行くにふさわしい力強い市役所の実現を目指すためにも、私は自らが必要だと判断した時、役所の側では無く市民の側に立つ。それは役所にとっての抵抗勢力になるという意味ではない。行政と民間で培った経験を生かし、民意と役所の論理とをつなぐ橋渡し役となるつもりで、双方の立場の理解者として向き合うのである。

もともと優秀な者たちの集まりである。ありがたいことに職員はすぐに私の考え方を理解し、協働してくれている。今、津市役所がしなやかに変貌を遂げつつある。(了)

(2012年6月11日)

前葉 泰幸(まえば・やすゆき)氏のプロフィール

1962年三重県津市生まれ。東京大学法学部卒業後、1985年自治省(現総務省)入り。自治省税務局固定資産税課長補佐、宮城県総務部長、デクシア銀行東京支店副支店長、地方公共団体金融機構審査室長などを経て、2011年4月から津市長。